

二陸の文章制作について

— 陸雲「与兄平原書」を中心に —

西晋の陸雲（二六三—二八三）が、その晩年に兄の機に与えた三十数首の手紙「与兄平原書」は、主に文章制作に関して述べられたものであり、二陸および当時の文人が、どのようにして文章を作っていたのか、またどのような文章観を持っていたのかを、窺い知ることができる貴重な資料である。またこの「与兄平原書」はその口語表現の多用からもわかるように、極めて親しい立場の兄に対して、打ちとけた気持ちで書かれたものであり、それ故に、より具体的にその時の状況を知ることができるものなのである。

今、その一首を取り上げてみる。^②

雲再拜。仲宣の文は、兄の言の如く、実に張公の力を得たり。子桓の書の如きも、亦た自ら乃ち之を重んぜざらんや。兄の詩は、多だ其の「思親（詩）」に勝るのみ。「登楼の賦」は、乃ち「感丘（賦）」より煩なること無からんや。其の「弔夷齊」は、辞は偉と為さず。兄の二弔（「弔蔡邕」「弔魏武帝」）は自ら之より美なり。但だ其の「二子を呵す」るは少しく工みにして、正当に此の言を以て高文と為すのみ。

佐藤利行

文中に「於是」「爾乃」有るは、転句に於ては誠に佳なるも、然れども之を用ひざるを得ば、益々快ならん。故より無きに如かざること有り。又た文句中に於ては、自ら之を用ひざるべきとは、便ち少く。亦た常に云ふ、「四言の転句は、四句を以て佳と為す」と。往曾て兄の「七美」の「回煩手而沈哀結」の上、両句を孤と為す。今更めて規定するに、自ら応に用ふべからざる有り。時期当に爾るべきも、復た以て快ならずと為す。故に前に去る所有る多し。「喜霽（賦）」の「俯煩習均、弔誠重離」^③、此の下、重ねて此の如き語を得ば佳と為らん。思ふも其の韻を得ず。願はくは、兄為に之を益さんことを。謹啓。^④

すなわち、前半においては、王粲の詩文と兄のそれとを比較しつつ、陸雲の評価が述べられており、次で、文章制作における、「転句」についての詳細で具体的な意見が述べられている。それは、句を転ずる際には「於是」「爾乃」といった句端の語を用いない方がよい、四言句の場合は四句で句を転ずるべきである、といった陸雲の考え方である。またその次には、兄弟相互の具体的な添削の様子

が記されている。ここに言う「七羨」とは、兄機の作品であり、雲がそれを添削したのである。そうして「喜霽」とは、弟の雲が作った賦で、その添削を兄に依頼しているのである。

このように、雲の三十数首の手紙の中には、兄弟相互の添削の様子が、具体的な作品名、あるいは具体的な語句を示しつつ、繰り返して述べられている。以下、この「与兄平原書」を中心として、二陸の文章制作の実態と、それを通して知ることのできる両者の文章観について述べることにしよう。^④

一、文章制作の実態

先ず文章制作の実態については、兄弟の間で問題にされている事柄を、(1)語について (2)句について (3)一篇の構成 (4)文章の「清」と「情」とに分けて見てゆくことにする。その結果、彼等の文章制作の実態があらまし把握できると思う。

(1) 語について

陸雲には「南征賦」という作品があるが、この「南征賦」の草稿の一部と思われるものが、「与兄平原書」の中にある。今これと、兄との添削を経た後の完成稿と考えられる、「陸士龍文集」(四部叢刊本)所収の「南征賦」とを比較してみると、文字の異なる著しく多いのが目につく。

(草稿)

命屏翳以夕降
式飛廉而朝興
塗蒙雨而後清
景帶天而先澄
陪峻臣於彫軒
列名僚於後乘
猛將起而虎嘯
商風肅其來庇
士憑勢而響駭
馬噓、天而景凌

(完成稿)

命屏翳以夕降
式飛廉以朝升
塗蒙雨而復清
景帶天而光澄
陪武臣於彫軒
列名僚於後乘
猛將起而虎嘯
商飈肅其來庇
士憑威而響駭
馬歔、天而景凌

この中には、「塗」と「塗」のようにただ単に字体の違いによるもの、また「而」と「以」のようにほとんど同じように用いられるもの、あるいは「先」と「光」のように字形がよく似ているための誤りとも思えるものなどもあるが、その他の異同を見る限りにおいて、添削の過程では、語についての細かな配慮がなされていたようである。以下、陸機・陸雲の間で議論されていた、「語」についての主要な問題を取り上げてみる。

1. 「新奇」

陸雲は「新奇」なる語の重要性について、次のように述べている。兄頼作爾多文、而新奇乃爾。真令人怖、不当復道作文。(8)兄は頼に爾き多くの文を作り、而も新奇は乃ち爾り。真に人をし怖れしめ、当に復た文を作るを道ふべからず。

すなわち、兄は忽ちのうちに多くの文章を作り、しかも「新奇」な語が見られる。これでは私は頭が上がらないし、もう文章を作っているなんて言えない、と言う。

また次のようにも言う。

作文、臨時輒自云佳、小久報、不能視。為此故息意爾。今視所作、不謂乃極、更不自信。恐年時間、復捐棄之。徒自困苦爾。兄小加潤色、便欲可出。極不苦作文、但無新奇、而体力甚困瘁耳。(16)

文を作り、時に臨んで輒ち自ら佳なりと云ふも、小や久しくして報ずるに、視る能はず。此の為の故に息意するのみ。今 作る所を視るに、乃ち極なりと謂はず、更に自ら信ぜず。恐らくは年時の間、復た之を捐棄されん。徒自に困苦するのみ。兄 小しく潤色を加ふれば、便ち出だすべけん。極めて文を作るに苦しまざるも、但だ新奇無くして、体力 甚だ困瘁するのみ。

文章を作った時にはすばらしい出来栄であると思つたが、しばらくして兄に送つてのち、更めて見てみるにとても見られたものではなく、ために書くのをやめてしまう。この作品も、つまらないとは思わないが、どうも自信がない。一年そこらのうちに棄てられてしまふかもしれない。ただ苦勞するばかりである。しかし、兄に少し潤色してもらえば、世に出せるであろう。私は文章を作ることは一方向に苦にならないが、ただその文章に「新奇」な語が無く、体だけが疲れてしまふ、と。

どうも陸雲には、「新奇」なる語がなかなか思いつかなかつたようであるが、この点こそは、兄陸機の得意とするところであつたら

しい。

「文賦」に、

百世の闕文を収め、千載の遺韻を採る。朝華を已に披けるに謝り、夕秀を未だ振かざるに啓く。

と言っているのは、陸雲の言う「新奇」なる語について言っているものと思われる。また、『文心雕龍』では「新奇」について、

新奇とは、古を擯けて今を競ひ、危側して詭に趣く者なり。(体性)

と言う。すなわち「新奇」とは、これまで見られなかつた表現の新鮮さと、人々の思いもつかなかつた発想を含むことば、というほどの意味であろう。「文賦」に、

必ず擬する所に殊ならず、乃ち闇に囊篇に合ふことあり。予が懐に杼軸すと雖も、佗人の我に先んずるを怵る。苟に廉を傷りて義を愆れば、亦た愛すと雖も必ず捐つ。

どんなに気に入つたことばであっても、前人と偶然に一致した場合には、残念であるが捨ててしまふ、と言うのは、それではもはや「新奇」とは言えないからであり、「新奇」なる語を求め続ける陸機の姿勢を示している。実際に「文賦」には、随処に「新奇」な語句が見られる。例えば、

佇中区以玄覽 中区に佇ちて以て玄覽し、

頤情志於典墳 情志を典墳に頤ふ。

遵四時以歎逝 四時に遵つて以て逝くを歎き、

瞻万物而思紛 万物を瞻て思ひは紛る。

悲落葉於勁秋 落葉を勁秋に悲しみ、

喜柔條於芳春 柔條を芳春に喜ぶ。

心慄慄以懷霜 心 慄慄として以て霜を懷き、

志眇眇而臨雲 志 眇眇として雲に臨む。

詠世徳之駿烈 世徳の駿烈を詠じ、

誦先人之清芬 先人の清芬を誦す。

遊文章之林府 文章の林府に遊び、

嘉麗藻之彬彬 麗藻の彬彬たるを嘉す。

慨投篇而援筆 慨として篇を投じて筆を援り、

聊宣之乎斯文 聊か之を斯の文に宣ぶ。

この部分だけを見ても、李善が典故を挙げているものは、「玄覽」「典墳」「懷慄」「懷霜」「世徳」「彬彬」「援筆」などであり、李善が用例を挙げないものに、「歎逝」「思紛」「勁秋」「芳春」「臨雲」「駿烈」「清芬」「林府」「投篇」などがあり、これらの中でも「歎逝」「勁秋」「林府」「投篇」といった語は、恐らく新しく創造されたもので、「新奇」なる語と言ってもよからう。しかし、「新奇」な語が多いというのは、逆に言えば典故をふむ語が少ないということで、確かに陸機の作品には、それらの語が比較的少ないようである。⑤ 陸雲もその点について、次のように述べている。

張公昔亦云、兄新声多之不同也。典当故為未及。彦威亦云爾。(19)
張公も昔亦た云ふ、「兄の新声 多くは之れ同じくせざるなり。

典は当に故より未だ及ばずと為すべし」と。彦威も亦た爾りと云ふ。

つまり、張華や彦威が、兄の「新声」は、ほとんどまねることは

できないが、逆に「典」なる、落ち着いた要素（典故を用いることによる内容的な落着きをいうのであろう）には欠けており、まだまだである、と言っている、というのであるが、これは「新声」、すなわち「新奇」なる語があまりに多すぎて、かえって文章がうわついたものになっていることを指摘したものであろう。

陸雲はまた、「新綺」ということも言う。

然此文、甚自難。事同又相似、益不古。皆新綺。用此已自為洋洋耳。(4)

然れども此の文、甚自だ難し。事同じく又た相ひ似たるも、益々古ならず。皆な新綺なり。此を用て已自に洋洋為るのみ。

この種の文章は、とても作り難いものである。しかし兄の（「祠堂頌」）は、使われている事柄は他の人と同じで、またよく似たものであるが、表現に古さが無く、どれも「新綺」なために立派な作品となっている、と言う。ここに言う「新綺」とは、使い古されていない綺麗な語のことであろう。使い古された所の無い「新」という点では、「新奇」と共通しているが、「新奇」が、これまで誰も思いつかなかったというその珍らしさに重点があるので対し、「新綺」の方は、その色どりの美しさに重点が置かれているのであろう。では次に、「綺語」に関する議論を見てみよう。

2. 「綺語」

陸雲は、陸機の「新奇」「新綺」なる語を高く評価しているが、その「綺語」について、

「文賦」甚有辞、綺語頗多、文適多体、便欲不清。(8)

「文賦」は甚だ辞有るも、綺語頗や多く、文は適に体多く、便ち清ならざらんとす。

と述べている。すなわち、「文賦」は、表現は豊かであるが、「綺語」がいささか多く、「清」ではないようだ、と言う。後述するように、文章について「清」ということを重要視する陸雲にとって、兄の「文賦」は、やや「綺語」が多すぎたのであろう。文章にとって「綺語」は必要であると感じていた陸雲ではあるが、それが多すぎると、かえって「清」という別の条件を欠くことになる。「綺語」は適度に用いることが、何より大切であると考えていたようである。陸機の文章には、例えば「文賦」を見てみると、実にきらびやかな語が多い。

○播芳和之馥馥、発青條之森森。

粲風飛而森豎、鬱雲起乎翰林。

○或藻思綺合、清麗千眠。

炳若振繡、懷若繁絃。

○石韞玉而山輝、水懷珠而川媚。

彼榛楛之勿剪、亦蒙榮於集翠。

また、先に引用した雲の「南征賦」の草稿に、

若疾流之變駿沈、驚馳之靡狂塵。

という句があったが、これは兄機の添削の結果、完成稿では、

若扶桑之振華葉、皓天之散朝霞。

のようになっており、このような点は、陸機の得意とするところであった。しかし、「綺語」の多用は、陸機だけのことでなく、

『文心雕龍』に、「晋世の群才、稍や輕綺に入る」（明詩）「魏・晋は淺にして綺」（通變）とあるように、当時の文壇においては「綺」の要素が貴ばれていたのであり、「綺語」の多用を戒める雲の方が、例外的な存在であったといえよう。陸雲はまた、その文章の中心となる「出語」の重要性についても問題にしている。

3. 「出語」

「出語」について、雲は次のように言う。

「祠堂頌」已得省。兄文不得稍論常佳。然了不見出語、意謂非兄文之休者。前後読兄文、一再過、便上口語。省此文、雖未大精、然了無所識。(4)

「祠堂の頌」は已に省るを得たり。兄の文は復た稍や常に佳なりとは論ぜず。然れども了く出語を見ざるは、兄の文の休き者に非ずと意謂ふ。前後して兄の文を読むに、一再過すれば、便ち口語に上る。此の文を省るに、未だ大いには精ならずと雖も、然れども了く識る所無し。

「祠堂の頌」を見たが、兄の文章はいつもよいとかりにも言うわけにはゆかない。それにしても全く「出語」が無いのは、兄の文章のよいものではない。いつもなら一二度読めば、すぐ覚えられるのだが、この文章は、まだ詳しく読んだわけではないにしても、全く記憶に残らない。

また「出語」と同じであろうが、「出言」という表現がある。

「劉氏頌」極佳、但無出言耳。(5)

「劉氏の頌」は極めて佳なるも、但だ出言無きのみ。

「劉氏の頌」はとても立派であるが、ただ「出言」が無い、と言
う。すなわち、「祠堂頌」も「劉氏頌」も、よい作品ではあるが、
「出語」「出言」が見られないので、物足りぬと言うわけである。

この「出語」というのは、「文賦」に、

片言を立てて要に居る、乃ち一篇の警策なり。衆辞の條有りと雖
も、必ず茲を待って積を效す。亮に功多くして累寡し、故に足る
を取りて易へず。

つまり、ちょっとしたよい言葉をポイントに置けば、その一篇の
警策となり、必ず効果を上げるであろう、と言うものと、指してい
るのは同じであろう。また『文心雕龍』にも、

鴻筆を草創するには、先づ三準を標す。端を始めに履めば、則ち
情を設けて以て体を位す。正を中に挙げれば、則ち事を酌みて以
て類を取る。餘を終りに帰すれば、則ち辞を撮りて以て要を挙
ぐ。(鑿裁)

と述べてあり、この「撮辞以挙要」とは、要点を示すためにポイ
ントになる言葉を用いる、ということであり、すなわち「出語」と
同じことを言うのであろう。要するに、その文章の要点をはっきり
と表現するためのポイントとなる語が、すなわち「出語」「出言」
であり、文章には、そのような「出語」がなければならぬと言
うのである。これはただ単に、表現的に目立つ語というのではなく、
そこに文章の流れの中の要点となる内容が含まれたものでなくて
はならないようである。従って、このような「出語」のある文章
は、一二度読めば、すぐに口遊むことができるわけで、先の「祠堂

頌」は、この「出語」が無いために、全く記憶に残らないと言
うのである。

(2) 句について

以上の如く「語」について、二陸それぞれに細かな配慮がなされ
ていたようであるが、次に、句に関する意見を見てみよう。

句に関する陸雲の意見は、対句・転句・押韻などについてのもの
が見られる。

1. 対句

先ず、対句に関する議論を見てみよう。添削の過程において、次
のよな議論が交されている。

「扇賦」腹中愈首尾。発頭一而不快。言「烏云龍見」、如有不
体。(8)

「扇の賦」、腹中は首尾に愈る。発頭は一なるも快ならず。
「烏云龍見」と言ふは、体ならざる有るが如し。

すなわち、「扇の賦」は、中ごろは前後の部分よりもすぐれてい
る。書き出しはまとまっているがあまりよくない。「烏云龍見」と
言うのは、文章を成していないようである、と述べている。ここに
言う「扇賦」とは、陸機の「羽扇賦」で、その中ごろに、

隱九皋以鳳鳴。九皋に隠れて以て鳳鳴き、

游芳田而龍見。芳田に遊びて龍見る。

という対句がある。手紙に言うように、恐らく上句の「鳳鳴」は、
もとは「烏云」（「烏」は「鳥」の誤りであろう）となっていたの

を、陸雲に、対句として適切でない指摘されて改めたものと思われる。^①確かに「龍」に対して「鳥」を配したのでは、合わないようである。しかし陸機の方は、そのようなことはあまり気にしていなかったらしい。というのは、陸機の「文賦」には、

或虎変而獸擾 或いは虎変して獸擾し、

或龍見而鳥瀾 或いは龍見して鳥瀾す。

という対句があるからである。「虎」に対して「龍」、「獸」に対して「鳥」と使っており、それぞれの句についてみると、「虎」に対して「獸」というのはいいとしても、「龍」に対して「鳥」というのは、やはりそぐわない感じがする。しかし陸機はそれを改めていない。「羽扇賦」が陸雲の指摘によって改められているのは、恐らくまだ添削の段階であったために、改めることができたのであり、「文賦」の方はこの時点で、既に世に行われていたために、改めなかったのかもしれない。しかし、陸雲は完成後の作品の推敲について、それがすでに世に行われている作品であっても、さらに立派な作品にするために、後からいろいろと手を加えていたようである。ただ陸機はそれをしなかったらしい。対句としてふさわしくないとと思われる「龍」と「鳥」の組み合わせも、陸機にとってはあまり気にならなかったであろう。

次に、転句についての議論を見てみよう。

2. 転句

文章の途中で句の内容・形式を転ずる場名の留意点として、雲は次のようなことを述べている。

文中有「於是」「爾乃」、於転句誠佳、然得不用之、益快。有故不如無。又於文句中、自可不用之、便少。⁽¹²⁾
文中に「於是」「爾乃」有るは、転句に於ては誠に佳なるも、然れども之を用ひざるを得ば、益々快ならん。故より無きに如かざること有り。又た文句中に於ては、自ら之を用ひざるべきときは、便ち少く。

すなわち、文の途中で「於是」「爾乃」を用いる場合、転句の時はよいが、使わずにすめば、さらによい。むしろ無い方がよい。文中においては、用いなくてよい場合は、省いた方がよい、という。一般に句を転ずる場合には、「於是」「爾乃」といった句端の語を用いるが、陸雲は、なるべく用いない方がいいと言う。実際に彼の作品を見ると、その使用頻度が極めて低いことに気付く。例えば『文選』に収められている、陸雲とほぼ同時代の人の作品を見てみると、潘岳の「射雉賦」は、七七二字から成る作品であるが、「于是」「爾乃」「或乃」「亦有」「若夫」「若乃」「此則」といった句端の語が、八回用いられている。また成公綏の「嘯賦」は、七八五字から成るが、「于時」「是故」「若乃」「故能」「若夫」といった語が、七回用いられている。これに比べ、ほぼ同じ長さの七六〇字から成る陸雲の「歳暮賦」は、「夫何」「于是」が一回ずつ用いられているにすぎない。もちろん、陸雲の他の作品には、比較的多く用いられているもの（「寒蟬賦」「登台賦」）もあり、潘岳にも、それほど用いられていない作品（「秋興賦」「西征賦」）もあるが、全体的にみて陸雲はあまり用いておらず、漢代の賦などが転句ごとに「於是」「爾乃」などを用いるのに比べると、はるかにその回数は少ない。

さて、それでは陸雲は、句を転ずる際には、句端の語を全く用いないことを理想としていたかというに、必ずしもそうではない。それは、例えば「南征賦」の草稿には、転句のために「羊腸転時」(羊腸として時を転じ)「元兵時」(元なる兵は時に)といった句端の語が用いられているからである。陸雲は、句を転ずるための語として「於是」「爾乃」といった、言ってみれば平凡なものではなく、「羊腸転時」「元兵時」といった、かなり特殊なものを考えていたようである。転句の際にこのような句を用いるのは極めて珍しいことで、当時の他の文人達の作品を見ても、「羊腸転時」などのような句は見られない。しかし、雲のこの新しい試みに、兄の機は同意しかねたようで、完成稿では、「羊腸転時」は「爾乃」と改められ、「元兵時」は削られてしまっている。そうして陸雲の他の作品を見ても、「爾乃」「是故」「而後」「於是」「于時」「若夫」「既乃」といった、ごく普通のものしか見当らない。恐らく「羊腸転時」のようなものは、添削の途中で、兄に削られてしまったのであろう。

また先の手紙には、続けて次のように述べる。

亦常云、四言転句、以四句為佳。(12)

亦た常に云ふ、「四言の転句は、四句を以て佳と為す」と。

これは賦においては、四言句の場合、四句で転句するのがよいということであり、「四言句は四句」というのが、陸雲の理想であったようである。⑤ 実際「南征賦」の草稿を見ても、

熊羆之士、虓闕之將。雄声泉踊、逸気風亮。

のように、四字句は三例とも四句で終り、以下六字句が続いてい

る。

彼はまた、四字句が二句だけで終ってしまうのは「孤」であると考えており、同じく先の手紙に、続けて、

往曾以兄「七美」。「回煩手而沈哀結」上、兩句為孤。今更規定、

自有不応用。時期当爾、復以為不快。故前多有所去。(12)

往曾て兄の「七美」の「回煩手而沈哀結」の上、兩句を孤と為す。今更めて規定するに、自ら応に用ふべからざる有り。時期

当に爾るべきも、復た以て快ならずと為す。故に前に去る所有る

多し。

兄の「七美」の「回煩手而沈哀結」句の上は、二句が孤立しているから省いた方がよく、文章の流れからしてこの二句を使いたいであらうが、私はやはりよくないと思うので、以前から削ってきた、

と言う。また続けて、

「喜霽」。「俯煩習均、弔誠重離」、此下重得如此語為佳。思不得

其韻、願兄為益之。(12)

「喜霽」の「俯煩習均、弔誠重離」、此の下 重ねて此の如き語

を得ば佳と為らん。思ふも其の韻を得ず。願はくは、兄ために之を

益まさんことを。

と、自分の作品「喜霽賦」も、四字句が二句だけで孤立してしまっ

ているから、さらに二句を加えて四句にすればよいと思うのだが、

考えてみても適当な韻字が見つからないので教えてほしい、と兄に

頼んでいる。しかし陸機にも韻字が見つからなかったらしく、「陸

士龍文集」の「喜霽賦」のこの部分は、このままになっている。

陸雲の作品(賦)を見ると、四言二句が七例、六句が五例、八句

が一例あるだけで、あとの二十七例は全て四言四句である。また兄の作品（賦）を見ても、四言二句が三例、六句が六例、八句が一例で、あとの二十例は全て四言四句であるところからみて、四言句は四句でまとめる、という陸雲の考え方は、兄の機にも受け入れられたらしく、この点に関しては兄弟の意見が一致している。これに対し、当時の他の文人の作品には、四言句が十句以上続くものがあり、例えば潘岳の作品（賦）では、四言十六句を最高に（「橘賦」）、十句以上のものが十例、成公綏などは、四言句を三十二句も続けているものがある（「天地賦」）。陸機は「文賦」において、

或いは言を短韻に託し、窮跡に対して孤興^{おこ}る。俯しては寂寞として友無く、仰いでは寥廓として承くる莫し。偏絃の独り張れるに譬へ、清唱を含んで応ずる靡^なし。

と、句の短かいまとまりを作ると孤立してしまい、一本の弦だけで、それに共調する音が無いようだと述べるが、これは陸雲の、四言句を二句だけ用いると文章の中で孤立するという考え方と、相い通ずるものである。

3. 押韻

句を転ずる場合には、往々換韻が行われるが、その場合の押韻について、しばし問題にされている。

徹。与。察。と。皆。不。与。日。韻。思。惟。不。能。得。願。賜。此。一。字。⁽¹¹⁾

徹と察とは、皆な日と韻せず。思惟するも得る能はず。願はくは、此の一字を賜はらんことを。

「徹」と「察」は、どちらも「日」と韻が合わない。考えてみても適当な韻字が思いつかないので、教えてほしい、と言う。これは陸雲の「九愍」という作品についてのもので、その文中に、

君在初之嘉惠 每成言而永日
怨谷風之攸歎 彌九齡而未徹
願自献於承間 悲党人之造膝
舒幽情其曷訴 卷永懷而淹恤。

とあるから、この「膝」「恤」のどちらかは、もとは「察」であったものを、兄に添削してもらって改めたものと思われる。ただ「徹」はそのままになっており、恐らく兄の機にも適当な韻字が見つからなかったのか、あるいは別に換えなくても、このままでよいと考えたのであろう。

このように、弟にしばしば韻に関する添削を頼まれる陸機であるが、『文心雕龍』では、陸機の押韻について、次のように言う。

又た詩人の韻を綜^すぶるは、率ね清切多し。『楚辞』は辞^{ことば} 楚なり。故に訛韻 実に繁たり。張華の韻を論ずるに及び、士衡は楚多しと謂ふ。「文賦」も亦た称す、楚と知るも易^かへずと。靈均の声餘を銜^{ふく}み、黄鐘の正響を失すと謂ふべきなり。（声律）

ここに張華が陸機の韻は「楚」（南方楚地の音韻）が多いと述べたというのは、「与兄平原書」に、

張公語雲云、「兄文故自楚、須作文、為思昔所識文。」⁽¹⁵⁾

張公、雲に語りて云く、「兄の文は故^{もとよ}自り楚なれば、須らく文を作るには、為^{ため}に昔し識す所の文を思ふべし」と。

と述べているのによる。

先の「九愍」の例でもわかるように、雲は押韻に関してあまり自信がなかったようで、それ故に、音に関して神経質なほど嚴格であったのではないかと思われる。南方出身の彼にとつては、その音が「楚」であることが、非常に気になっており、またなかなか北方の音がマスターできなかつたらしい。一方、兄の機は、洛に出てからは「楚」の音を残しながらも、北方出身の文人（王粲ら）の作品を参考にして、北方の音をほぼマスターしていたようである。

このように、張華や劉勰によって、その音が「楚」であると評される陸機であるが、陸機自身はそのことをあまり気にしていない。思うに機には、自分こそが『楚辞』の流れを継ぐ者であるという自負があり、韻についても楚音を「訛」とは思っていないからであらう。陸雲は兄に、次のように言っている。

思兄常欲其作詩文、独未作此曹語。若消息小往、願兄可試作之。兄復不作者、恐此文独単行千載間。(13)

思ふに兄は常に其の詩文を作らんと欲するも、独り未だ此曹の語を作らざるのみ。若し消息小しく往かば、願はくは、兄試みに之を作るべけんことを。兄復た作らずんば、恐らくは此の文独単り千載の間に行はれん。

つまり、兄は「此曹の語」すなわち『楚辞』風の文章だけはまだ作っていない。もし兄が作らねば、「此の文」すなわち『楚辞』だけが千載の間に行われるであらう、と述べる。雲は兄を『楚辞』の後継者と見ており、恐らく機本人もそのように意識していたのであろう。「『文賦』はその音が『楚』であるが、私は改めない」と、

機に言わたのも、その理由によるものと思われる。

さて次に、一篇の構成については、どのようなことを問題にしているであろうか。

(3) 一篇の構成

以上のように、機雲兄弟は、語や句に気を配りながら、一篇の文章を作り上げてゆくが、彼らは数百字にも及ぶ文章を、一体どのような順序で作っていたのであろうか。そのことを示す資料として、次のものがある。

四言五言非所長、頗能作賦。為欲作十篇許小者、以為一分、生於愁思。(3)

四言五言は長ずる所に非ず、頗か能く賦を作る。為に十篇許りの小者を作り、以て一分と為さんとし、愁思を生ず。

これによると、陸雲は四言・五言の詩は苦手であるが、賦は少しはましに作れる、と言ひ、以下、その作り方を具体的に示している。つまり、先ずいくつかのまとまりを作っておいて、そしてそれぞれを作品の部分とし、後で一篇の作品にまとめ上げていったようである。また、

「歳暮賦」、甚欲成之、而不可自用。得此百数十字。今送。(5)
「歳暮の賦」、甚だ之を成さんと欲するも、而も自ら用ふべからず。此の百数十字を得たり。今送る。

と、「歳暮の賦」を完成させようと思うのだが、うまく出来ない。この百数十字を得たので、同封する、と言っていることから見て、凡そ百数十字くらいのまとまりを、各々の部分にしていたようであ

る。また、このことの旁証になり得るのが、すでに一部引用した「南征賦」の草稿である。これは恐らく、陸雲が兄に添削を依頼した際に、手紙に同封されたものと思われるが、当時はこのように、手紙に詩文を同封して、添削を依頼していたらしい。さてこの草稿であるが、「南征賦」の一部分で、一九一字から成っており、先の百数十字というのとほぼ一致する。このように、先ず百数十字くらいのまとまりをいくつか作っておいて、後でそれを組み立てて、一篇の作品にまとめ上げていたようである。

作品の構成についての添削を、先の「南征賦」の草稿を例として見てみよう。この篇は、さらに四つの部分から構成されている。すなわち、①戦いのようす ②戦いの終るようす ③帰還のようす ④帰還のようす（進軍のようす）の四つの部分である。

①爾乃使熊羆之士、燒闕之將。

雄声泉踊、逸氣風亮。

超三軍以奔厲、賈餘勇以成壯。

兆洪音於寂寞、先無声而高唱。

②元兵時、紛若屯雲、煥若積波。

授教斯謐、靜言勿譁。

嚴鼓隱其雲戒、万夫翕而咸和。

「治安歩以止立、応金奏而靡戈。

進總干以乘言、退揮旅而星羅。

③礼既畢、帰旅將振。

尋繁員転、因瀨蓋旋。

若疾流之繞駿沈、驚鷗之靡狂塵。」

④羊腸転時、命屏翳以夕降、式飛廉而朝興。

涂蒙雨而後清、景帶天而先澄。

陪峻臣於彫輅、列名僚於後乘。

猛將起而虎嘯、商風肅其來応。

士憑勢而響駭、馬噓天而景凌。

④の部分は③を承けて、兵士の帰還して行くようすと考えられるが、また「羊腸として時を転じ」て、再び進軍して行くようすともとれよう。

さて、草稿ではこのような構成になっていたものが、兄との添削を経た後の完成稿では、大きく変わってしまった。すなわち草稿の④の部分が、完成稿では冒頭の「羊腸転時」の四字を省いて①の前に置かれ、進軍のようすとして使われている。その理由を考えるに、この④の部分を帰還のようすにとれば、はじめの「屏翳」「飛廉」という神々の登場が、帰還の場面としてはふさわしくないと考えた兄の機が、構成に手を入れて、この部分をそのまま進軍の場面に置き換えたものと思われる。というのも、従来の伝統的な文章では、「屏翳」「飛廉」という神々は、例えば『楚辞』においては、天上界へ昇って行く主人公の先導として、また揚雄の「羽獵賦」などにおいては、狩り場に向かう時の先導として登場するのであって、これを陸雲のように帰還の場面に使ったのでは、今までの伝統的な文章構成法と合わなくなってしまふからであろう。またこの④の部分を進軍のようすにとった場合は、いったん帰還しかけて、その後いろいろの事があって再び進軍という複雑な筋立てが、兄の機には気に入らなかつたのであろう。このように、話の筋が変えられた完成稿では、この④の後に、「臨川屯於広陸、武騎被乎中陵」と

いう二句が加えられ、次の部分、すなわち出陣の儀式が行われる場面へと、みごとにつながれている。

また、草稿の②の後半「治安歩以止立」から③の終り「驚駭之靡狂塵」までの部分は、完成稿ではすっかり除かれてしまっている。もっとも完成稿の「南征賦」では、帰還のようすは述べられていないので、この部分は必然的に除かれるはずのものである。そもそも「南征賦」は、『呉書』陸抗伝注に引く「機雲別伝」に、

時に朝廷に故多く、機・雲並びに自ら成都王穎と結ぶ。穎は機を用て平原の相と為し、雲を清河内史とす。尋いで雲を右司馬に転ず。甚だ委仗せらる。幾くも無くして長沙王と隙を構へ、遂に兵を挙げて洛を攻め、機を以て後將軍と行し、王粹・牽秀等の諸軍二十万を督せしむ。士龍は「南征の賦」を著はし、以て其の事を美す。

というように、陸機の出陣に際してのものであり、これに帰還の場面を入れることは、やはりふさわしくないであろう。

また、削られてしまった部分(②の後半と③)の直前の二句は、完成稿では次の如く、四句になっている。

絶倡寂其既収、
万夫翕而咸和。
嚴鼓隱其雲戒、
万夫翕而咸和。
景燄暉而星羅。



これを見ると、もとの二句をそのまま利用して、それぞれに別の句を加え、全体として四句にしている。句数を増す際には、このような方法をとっていたのであろう。また増添された最後の句の「星羅」という語は、先に削られてしまった部分にあった語である。こ

の他にも、「靡戈」「總干」「驚駭」「狂塵」といった語が、削り去られてしまわずに、完成稿の他の部分に使われている。このように、機自身の気に入った語、好きな語は、削ってしまわずに、そのまま他の部分、ひいては他の作品に、更には自分の作品にも使ったようである。二陸の作品の間に、共通して用いられている語が非常に目につくのも、そのことによるのであろう。

ところで一篇を構成する文章の長さについて陸雲は、あまり長くない方がよいと考えていた。そのため、兄の文章が長すぎる事が気に入らず、いくらか遠慮しながらも、その点についてたびたび不満をもらしている。

「二祖頌」、甚為高偉。雲作雖時有一佳語、見兄作、又欲成貧儉家。無緣当致兄此謙辞、又雲亦復不以苟自退耳。然意故復謂之微多。『民不輟歎』一句、謂可省。(5)

「二祖の頌」は、甚だ高偉為り。雲の作 時に一佳語有りとも雖も、兄の作を見れば、又た貧儉家と成らんとす。当に兄に此の謙辞を致すべきに縁無く、又た雲亦復た以て苟も自ら退かざるのみ。然れども意 故より復た之を微や多しと謂ふ。『民不輟歎』の一句は、省くべきと謂ふ。

「二祖の頌」は、言うことにはない立派な作品である。自分などは時々「佳語」を持ってはいるが、兄に比べると、何も持たない貧乏人になったようだ。兄にこんな謙辞を言うべきではないし、自分も遠慮することはしないが、しかし、やはり少し長すぎるようで、「民不輟歎」の一句は、省いた方がよからう。

兄文章之高遠絶異、不可復称言。然猶皆欲微多。但清新相接、不以此為病耳。若復令小省、恐其妙欲不見、可復称極。不審兄由以為爾不。(11)

兄の文章の高遠絶異なるは、復た称して言ふべからず。然れども猶ほ皆な微や多からんとす。但だ清新相ひ接すれば、此を以て病と為さざるのみ。若し復た小しく省かしめば、恐らくは其の妙復た極と称すべきを見ざらんとす。兄の由は以て爾りと為すや不やを審らかにせず。

兄の文章はこの上もなくすばらしいが、どれも少し長すぎるようだ。ただ「清新」さがあるので欠点にはなっていないが、もう少し短くすれば、他人もまねることのできないほど立派な作品になるであらう。

このように、弟の雲にその文章が長すぎると指摘される陸機であるが、彼自身も「文賦」の中で、

辞達して理挙がらんことを要す、故に冗長を取ること無し。

と、長つたらしい文章はよくないと言つてはいる。ただ陸機の長さの概念は、雲のそれとは、かなり異なりがあったようである。『文心雕龍』でも、

陸機は才は深を窺はんとし、辞は広を索めんことに務む。故に思ひは能く巧に入れども、繁を制せず。士龍は朗練にして、識を以て乱を検す。故に能く采を布くこと鮮浄にして、短篇に敏なり。

(才略)

と、陸機の文章は、思考は巧みであるが繁多であり、陸雲の文章は、新鮮清浄で短篇にすぐれていたと、作品の長さについて、兄弟

を対照的に捉えている。

陸雲はまた、具体的に作品の長さを示して、次のように述べる。有作文唯尚多、而家多猪羊之徒。作「蟬賦」二千餘言、「隱士賦」三千餘言。既無藻偉体、都自不似事。文章実自不当多。(21) 文を作るは唯だ多きを尚ぶこと有るのみにして、家に猪羊の徒多し。「蟬の賦」二千餘言、「隱士の賦」三千餘言を作る。既に藻偉の体無く、都自て事に似ず。文章は実自に当に多かるべからず。

文章はただ長ければいいという文章家が多く、二千字・三千字もあるものを作っている。こうなると「藻偉」(かざりたてた美しさ)が無いばかりでなく、賦とは思えないものになってしまう。文章は本当に長くないのがいい、と言う。実際に陸雲の作品を見ても、賦で最も長いものは「南征賦」の七二二字であり、他の作品はどれも五百字前後のものばかりである。ところが、例えば『文選』に収められる機の「文賦」は一五五〇字、潘岳の「西征賦」ともなれば、四三六六字の長大な作品である。陸雲としては、ただ長いだけの文章には価値を認めず、短く引き締った文章を理想としていたようである。

(4) 文章の「清」と「情」

以上、陸雲と陸機の、語・句・文章構成それぞれについての考えを見てきたが、ここでは文章の「清」と「情」に関する両者の意見を窺ってみることにする。

1. 「清」

陸雲は兄の作品について、しばしば「清」のつく語で批評を下している。

○省「述思賦」、流深情至言、実為清妙。(8)

○「弔蔡君」、清妙不可言。(9)

○「漏賦」、可謂清工。(8)

○兄「園藝詩」、清工。(8)

○「丞相贊」云、「披結散紛辞中原」、不清利。(9)

○兄「丞相箴」小多、不如「女史」清約耳。(8)

これらの例を見ると、陸雲は「清」ということを、文章の、主として表現についての必要条件として考えていたようである。「清」なる文章について、雲は次のように言う。

雲今意視文乃好清省、欲無以尚。意之至此、乃出自然。張公在者必罷、必復以此見調。(11)

雲は今、意に文を視るに乃ち清省を好み、以て尚くはふること無からんと欲す。意の此に至るや、乃ち自然に出づ。張公もし在らば、必ず罷めんも、必ず復た此を以て調みめられん。

すなわち、雲は「清省」なる文章、言い換えれば「繁」でないものを理想としており、そうして「清省」ということを心がけておれば、自然な文章ができるのだと言う。そして、張華が生きていたならば、そのような文章を否定するであろうが、同時にまた、その故にこそ、私の文章を認めてくれるであろう、と言う。そこには陸雲の、自分の文章観に対する自信のほどを窺うことができよう。

このように、「清省」なる文章を理想とする雲にとって、「綺

語」が多く、文体が繁雑で長く、とかく「清」の要素に欠ける傾向にある兄機の文章は、いつも気になっていたとみえて、先に挙げたように、常に「清」ということを持ち出して批評を加えているが、もう少し具体的にその批評を見てみよう。

陸雲は兄の「文賦」について、

「文賦」甚有辞、綺語頗多、文適多体、便欲不清。(8)

「文賦」は甚だ辞有るも、綺語や頗多く、文は適まさに体多く、便ち清よならずらんとす。

と、表現が豊かで「綺語」が多く、文章は叙述の「体」が煩わしくて、「清」ではない、と評している。確かに「文賦」を見ると、実に様々な「体」によって構成されている。先ず書き出しは、六字句が十四句続いた後、

其始也、皆収視反聽、耽思傍訊。

精驚八極、心遊万仞。

其致也、情瞳矐而彌鮮、物昭晰而互進。

傾群言之瀝液、漱六藝之芳潤。

浮天淵以安流、濯下泉而潛浸。

於是沈辞佛悅、若遊魚銜鉤而出重淵之深。

浮藻聯翩、若翰鳥纓繳而墜曾雲之峻。

収百世之闕文、採千載之遺韻。

謝朝華於已披、啓夕秀於未振。

觀古今於須臾、撫四海於一瞬。

然後選義按部、考辞就班。

抱景者咸叩、懷響者畢彈。

或因枝以振葉、或沿波而討源。
或本隱以之顯、或求易而得難。
或虎變而獸擾、或龍見而鳥瀾。
或妥帖而易施、或阻滯而不安。

と、「其始也」「其致也」「於是」「然後」の下に、それぞれ四字句、六字句、四字・十一字句、六字句、四字句、五字句と目まぐるしく変化し、その後「或」の形の六字句が八句も続く。このよくな叙述の「体」の目まぐるしい変化を、陸雲は「体多」くして「清」でないと言うのであろう。陸雲の賦では、まずこのようなのは見られない。彼の賦はそのほとんどが、四字句、六字句の繰り返しであり、形式としては単調であるが、どれも五百字前後の短篇のために、その単調さを感じさせないのであろう。長大な作品であれば、「体」の変化や「新奇」な語、「綺語」によって、その長さが気にならないようにカバーしなければならず、雲にはそれは不得手であった。

さて、このような「文賦」について『文心雕龍』でも、「陸の賦は巧なるも碎乱なり」（序志）と批評しているが、それは陸雲の指摘しているようなことを指しているのであろう。

兄に対して、雲はまた次のように言う。

兄往日文、雖多瑰鏤、至於文体、実不如今日。(2)

兄の往日の文は、瑰鏤多しと雖も、文体に至りては、実に今日に如かず。

兄の昔の文章は、「瑰鏤」（きらびやかで目新しい）な言葉は多いのだが、叙述の体は今のものに及ばない、と言ひ、同じ手紙に、

張公文無他異、正自省、無煩長。作文正爾、自復佳。(2)

張公の文は他異無きも、正自に情省にして煩長無し。文を作りて正に爾らば、自ら復た佳なり。

張華の文章は「情省」で「煩長」な所が無く、それで立派な作品たり得ているではないか、と言う。「煩長」とは、別の所に、

尋得李龍「勸封禪」草。信自有才、頗多煩長耳。(2)

尋いで李龍の「封禪を勸むる」の草を得たり。信自に才有るも、頗や煩長多きのみ。

李龍の「封禪文」の草稿を手に入れた。本当に才の有るものであるが、少し「煩長」な所が目につく、とあるのを参考にすれば、ごたごたと長ったらしいことを言うのであろうが、そのような所の無い、引き締った文章こそ、陸雲が兄に望むものであった。

陸雲と陸機のこのような違いについては、『文心雕龍』でも、士衡の才優るが如きに至っては、辞を綴ること尤も繁に、士龍は思ひ劣れども、雅り清省を好む。雲の機を論ずるに及び、亟は其の多きを恨むも、清新相ひ接すれば、以て病と為さず」と称するは、蓋し友手を宗びしのみ。（鏘裁）

と、陸機の「繁」と陸雲の「清省」とを対照的に捉えている。「亟恨其多」とは、先にも述べたように、機の作品が長すぎることに對する不満であるが、その「多」すぎる中にも、表現に「清新」さがあるからこそ、その欠点が補われているのだと言う。

2. 「情」

陸雲には、「九愍」という作品がある。その序に、

昔、屈原 放逐せられて、「離騷」の辞興る。今より古に及ぶまで、文雅の士、其の情を以て、其の辞を遊び、意ひを表はさざるは莫し。遂に作者の末を嗣ぎて「九愍」を述ぶ。

というように、この「九愍」は、屈原の意を継ぐものであり、特に「楚辞」の九章に倣って作ったものである。ところで、この「九愍」の添削をめぐる議論が展開されている手紙がある。

雲再拜。誨「九愍」如所勅、此自未定、然雲意自謂、「故当是近所作上近者」意又謂、「其与漁父相見以下尽篇為佳」謂兄必許此條。而淵弦意呼作脱可行耳。至兄唯以此為快。不知雲論文、何以当与兄意、作如此異。此是情文、但本少情、而頗能作汜說耳。又見作「九」者、多不祖宗原意、而自作一家說。唯兄說、「与漁父相見、又不大委曲尽其意」雲以原流放、唯見此一人、当為致其義。深自謂佳。願兄可試更視与漁父相見時。語亦無他異、附情而言、恐此故勝淵弦。兄意所謂不善、願疎勅其舛緒。亦欲成之令出、意莫更感如惡所在。以兄文、雲猶時有所能得言、雲前後所作。謹啓。

雲再拜。「九愍」を誨へて勅す所の如きは、此れ自ら未だ定せざるも、然れども雲の意自ら謂へらく、「故より当に是れ近ごろ作る所の上近なるべき者」と。意に又た謂へらく、「其の漁父と相ひ見る以下の尽篇は佳為り」と。兄必ず此の條を許めんと謂ふ。而るに淵弦は、意脱を作して行ふべきと呼ぶのみ。兄に至りては唯だ此を以て快と為すのみ。雲の文を論ずるや、何を以て当に

兄の意と、此の如き異を作すかを知らず。此れは是れ情文なるも、但だ本より情少なくして、頗る能く汜説を作すのみ。又た「九」を作る者を見るに、多く原の意を祖宗とせずして、自ら一家の説を作す。唯だ兄は、「漁父と相ひ見るを、又大いには委曲に其の意を尽さず」と説くのみ。雲は原の流放せられて、唯だ此の一人を見るのみを以て、当に其の義を致すと為すべし。深く佳と謂ふ。願はくは、兄 試みに漁父と相ひ見る時を更視すべけんことを。語に亦た他異無きも、情を附して言ひたれば、恐らくは此れ故より淵弦に勝らん。兄の意 善からずと謂ふ所、願はくは、其の舛緒を疎勅せんことを。亦た之を成して出ださしめんと欲するも、意 更に惡の在る所の如きを感じる莫し。兄の文を以てすら、雲猶時に言ふを得る所有り。雲の前後して作る所をや。謹啓。

右によると、陸雲は、自分の作品はよくできており、特に「漁父と相ひ見る」こと以下、一篇の終りまでがすばらしい、と言う。すなわち陸雲は、漁父と出合うことを言うことによって、この文章に「情」をもち込もうとしたのである。ところが兄の方はこれに反対で、淵弦の言うように、「漁父と相ひ見る」ことを省いた方がいい、と考えていた。ただ陸雲は、近ごろの「九」の作者は、屈原の意を祖宗とせず、勝手に一家の説を成しており、自分の作品の「漁父と相ひ見る」ことこそが、屈原の意を祖宗として「情」を込めたものである、と主張する。「情」とは、その作品の主題について作者の懐いている心情のことであろうが、この「情」をいかに作品に

もり込むかに関して、兄弟の意見が全く食い違っている。

陸雲はさらに別の手紙で、次のように言う。

「九愍」如兄所誨、亦殊過望。雲意自謂当不如三賦。情難。非体中所長。欲徧周流、雲意亦謂為佳耳。然不云其愍於与漁父。(17)

「九愍」、兄の誨ふる所の如きは、亦た殊に望みに過ぐ。雲の意自ら謂へらく、当に三賦に如かざるべしと。情は難し。体中の長

ずる所に非ず。徧く周流せんとするは、雲の意亦た佳と為すと謂ふのみ。然れども其れ「漁父と」より愍るとは云はず。

つまりここで意味する所は、「情」は本当に難しく、自分の得意とする所ではないが、兄が「徧ねく周流せん」とすることだけを言いい、「漁父と出会う」ことを言わないのは、それはそれでよいとは思うが、やはり「漁父と（相ひ見る）」ことを言う方が、よりすぐれている、という如く考えられる。とすれば陸雲はあくまでも、「漁父と相ひ見る」という事柄を述べることによって、その心情を表現しようとするのであるが、兄の方は、そのような事柄を言わずに心情を述べるのが望ましいと言う。恐らく事柄によらなくても、語句や表現の工夫によって「情」を盛り込むことができると思えるためであろう。このように、兄弟の間で添削が繰り返されて出来上がった「九愍」であるが、陸雲は自分の意見押し通したと見え、「陸士龍文集」所収のものは、「遇漁父之戾止、興讜言而来愍（漁父の戾止するに遇ひ、讜言を興して来り愍ふ）」云々のようになっており、漁父との出会いを述べている。

陸雲が「情言」が苦手であったことは、別の手紙にも次のようにある。

情言深至、述思自難希。(18)

情言深く至れば、思ひを述ぶること自ら希ひ難し。

あまりに心情のこもった言葉ばかりを連ねると、自分の思いをそのままに述べることは難しくなるように思われる、と。しかし陸雲は、不得手な「情言」を何とかこなそうとする努力も一方ではしている。

往日論文、先辞而後情、尚絜而不取悦沢。嘗憶兄道張公父子論文、実自欲得。今日便欲宗其言。(11)

往日 文を論ずるや、辞を先にして情を後にし、絜を尚びて悦沢を取らず。嘗に憶ふ、兄の張公父子の文を論ずるは、実自に得んと欲すと道ふを。今日便ち其の言を宗ばんと欲す。

すなわち、以前は「辞」つまり表現の方を先にして、「情」は後回しにしていたが、兄が張華らの文章論を話すのを聞いて、その考えを改めた、と言う。言うまでもなく、適度な「情」は文章には不可欠な要素である。「文心雕龍」にも、

情の為にする者は、要約にして真を写し、文の為にする者は、淫麗にして溢に煩ふ。(情采)

と、自分の心情を表現するための文章は、簡潔でよく真実を写しているが、美文のための文章は、華美にすぎて真実を失ってしまう、と言っている。このことは陸雲自身も感じていたようで、先にも挙げたが、

此是情文、但本少情、而頗能作汎説耳。(20)

これは是れ情文なるも、但だ本より情少なくして、頗る能く汎説

を作すのみ。

「九」体の文章は、感情を込めて書かねばならないが、自分はもとも情が少なく、ごたごたと餘分な言葉並べたてているにすぎない、と言っている。雲の志す「清省」なる文章は、「情言」を適度に用いることによって、更に理想的なものになるはずであった。しかし、陸雲から言えば兄の「情」は、先にも述べたように、あまりに「繁」でありすぎた。文章に「情」を込めすぎて表現すると、かえって「清」でなくなってしまう。文章に「情」を込める、その加減が難しいのである。『文心雕龍』に、「騷に效たらひて篇を命ずる者は、必ず艶逸の華に帰す」(定勢)と、『楚辞』に倣った作品は、「艶逸」な華やかさがあるというが、押韻においてさえかなり意識的に「楚」であった陸機の作る文章は、あまりに「情」が込めすぎたものであったのであろう。

二、文章観

以上、二陸の文章制作の実態を見てきたが、彼らの文章制作のよりどころは、それぞれが抱えている確乎たる文章観にある。それは時によっては互いに一致することもあれば、また「九愍」の添削に見られるように、対立することもある。

文章制作の実際において、さらに二陸の対立点を挙げるならば、先ずその文章構成について挙げることができよう。それは「南征賦」における、陸雲のこれまでの伝統的な文章構成とは異った、「屏翳」「飛廉」という神々の使い方である。また「転句」における独創的な見解がある。すなわち陸雲は、文章を転ずる際の句端の

語として、従来見られなかった、例えば「羊腸転時」などというものを考えていたようである。しかしこのような、言ってみれば従来の文章作法に対する挑戦とも見られる陸雲の文章観、それは同時に自分の文章の単調さを破るためのものであったが、これらの陸雲の試みは、新しさを志向する反面、古めかしいところのある陸機には受け入れられなかったようで、そのことは今日に残る、兄の添削の手を経た陸雲の諸作品が証明している。

「長さ」に対する二陸の概念の大きな隔たりも、対立点の一つと言える。煩雑さの無い、「清」なる文章を目指した陸雲は、兄の文章に対して、常に「多」ということを言う。しかし、様々な「体」に富み、「新奇」なことばや「綺語」を随処にちりばめ、「情言」を多用して感情豊かに表現する陸機の文章は、読む者にとってその長さは、決して気にならない。むしろ短篇であっては、その魅力は消え失せてしまうかに思われる。それに対し、文体も単調であり、「新奇」なる語や「綺語」に乏しく、「情言」を用いることが苦手な陸雲の文章は、長篇であってはつまらないものになってしまう。そのことを自覚していた陸雲は、作品を短篇にまとめ、そうして短篇ながらも充実した文章にするために、内容とする事柄や、転句、対句、押韻などについて、彼なりの工夫をこらしたのである。

以上の如く対立点の多い二人ではあるが、どうしても見逃してはならないのは、彼らには絶えず『楚辞』の正統を継ぐ者としての共通の意識があったことである。この両者に共通する基盤の上に立っていたからこそ、互いに異なる文章観を持ちながらも、文章について議論を交え、添削を繰り返すことによって、自分に欠けている要素を取り入れ、それぞれに理想とする文章を目指すことができたの

ではあるまいか。これら二陸の文章観の詳細については、別の機会に稿を更めて考察を加えることにしたい。

注

- ① 森野繁夫「六朝漢語の研究——陸雲『平原に与うる書』の場合——」（「広島大学教育学部紀要」二十八号）参照。
- ② テキストは四部叢刊本「陸士龍文集」を用い、「全晋文」に収める「与兄平原書」を参考した。なお引用文の下の数字は、テキストにおける手紙の配列順を示す。
- ③ 「陸士龍文集」に収める「喜霽賦」では、「煩」を「順」に、「均」を「坎」に、「弔誠」を「仰熾」に作る。
- ④ 陸雲の「与兄平原書」を資料とし、雲の文学観を探ることを目的とした論文に、釜谷武志氏の「陸雲『兄への書簡』——その文学論的考察——」（「中国文学報」第二十八冊）があるが、それは、前代学者（蔡邕、王粲）と兄機の作品に対する陸雲の記述を通して、雲の文学観が「清」にあることを証明せんとしたもののようなものである。それに対して本論文は、同じく「与兄平原書」を資料とするが、その目的は、二陸が語句、文体のどのような点に意を用い、いかなる過程を経て文章を作っていたかを見てゆき、西晋文人の文章制作の実態を明らかにして、晋代文学説明の一助とせんとするものである。
- ⑤ 釜谷氏はこの部分を、「独創性が無いと、全体がダイナミックな力感に欠けてしまって、哀憊しきったものになるのである」と解しておられる。
- ⑥ 小尾郊一「陸機の文賦の意図するもの」（「広島大学文学部紀要」

第二十八巻）参照。

⑦ 高橋和巳氏は、「鳥を言いて龍見れると言うは、体ざる有るが如し」と解され、「羽扇の賦」の「彼凌霄之遼鳥、採鮮輝之蒨荷。隠九皋以鳳鳴、游芳田而龍見」の「鳥」と「龍見」を指すとしておられるようだが（「陸機の伝記とその文学」、「中国文学報」第十一第十二冊）、対偶としてはむしろ「鳳鳴」と「龍見」との箇所を指すと解した方がよからう。

⑧ 釜谷氏は、「転句については、陸雲は四言詩の場合四句ごとに、即ち同韻を二字用いるだけで換韻するのがよい、と主張している」とされるが、『文心雕龍』「章句篇」に劉勰が引くが如く、これは文章（賦）についての意見であって、「詩」についてのことではない。

⑨ 陸雲は詩は苦手であつたらしい。

張公箴誄、自過五詩耳。但雲自不便五言詩、由已而言耳。⑩ また文章においても、四言五言は不得手だったようである。

大類不便作四言五言。⑪

⑩ 釜谷氏は、「文賦は甚だ辞有り、綺語頗る多し。文適し多ければ、体便ち清ならざらんと欲す」と、「体」を下句につけて読まれ「文賦」は表現が非常に豊かで、きらびやかな言葉がやや多すぎるようだ。華麗な表現技術が多ければ、全体として調和のとれたスタイルに、すがすがしさが欠如してしまうのではないだろうか」と解されている。

⑪ 『文心雕龍』にもここを取り上げ、又陸雲自称、往日論文、先辞而後情、尚勢而不取悦沢。及張公論文、則欲宗其言。（定勢）と、「契」を「勢」に作るが、「契」が是であろう。